



この夏の私の異文化交流

秋田県五城目町立五城目第一中学校

二年 大塚 琥太郎

「琥太郎も自分の部屋を掃除してね。」

六月になって急に姉、母、祖母が家の片付けを始めた。いつもは乱雑な状態でも平気な姉が、掃除をするのは、珍しいなと思った。

ところが数日後、「六月末にアメリカ人の留学生がホームステイするから。」と姉が言い出した。一瞬、何を言ってるのか分からなかった。しかし、知らなかったのは私だけで、実はかなり前から決まっていたらしい。

私は初めての人と話をするのが、あまり得意ではない。進んで話そうとも思わない。まして外国人となれば、何を話したらいいのか全く見当がつかない。英語は嫌いではないが、外国人と直接会話するのは、ALTの先生の他に経験がない。

留学生が来日する二週間前、説明会を兼ねたオリエンテーションが行われた。英語を話すことが大好きな姉は、嬉々として自己紹介していたが、私はため息の連続だった。これでは部活できつい練習をしたり、宿題をしたりしている方がまだましだと思っただ。しかし財団の方の次の言葉は心に残った。

「異文化を家庭に入れるのは大変だし、驚くことも多いです。しかし新しい発見や達成感など、日常では得られない貴重な体験ができます。トラブルの

数より、楽しみや驚きの方がずっと多いと体感できます。」と。今までは何て面倒なことだと思っ
ていなかったが、このお話を聞き、この夏、新しい
体験と異文化交流にチャレンジしてみようかと思
うようになった。

とりあえず、私なりの準備として次の三つを頑張
ることにした。一つ目は、英語の授業を大切に受け
ること。授業で習った英単語や文法を駆使し、声に
出して実際に使えるようになるためだ。二つ目は、
留学生の国について調べること。コミュニケーション
をとるためには、相手との共通の話題づくりが大
切だからだ。三つ目は、留学生に快適に過ごして
もらうための環境づくり。慣れない生活習慣で疲れる
だろうし、一人になる時間も必要だろうと考え、ベッ
ドを整えたり「のれん」を掛けたりした。

ある日、部活を終えて帰宅すると、留学生のカイ
ルが「オカエリナサイ。」と片言の日本語で出迎え
てくれた。事前に姉から日常英会話の特訓を受けて
いたはずが、いざ外国人を目の前にすると一片の単
語すら出ない。頭が真っ白になり、手の平には持
ちの悪い汗が…。「どうも。」言えたのは、そのた
つた一言。すっかり落ち込んでいた私を尻目に、母は
大してよくもない発音でしつかり笑いをとっている。
英語を全く話せない弟が「ゲーム、ゲーム。」と朗
らかな笑顔で誘っている。英語を毎日勉強している
私より、弟や母の方がコミュニケーション能力では
断然上だということを感じ知らされた。この時、私
はコミュニケーションをとるためには、もちろん英
語が話せるならそれにこしたことはないが、それ以
上に自分の気持ちを相手に伝えようとする熱意が大
事なこと気付いた。それからは、ゆっくりの英語
とジュエスターを交じえ私なりの言葉のキャッチ
ボールをすることにした。男鹿の観光地の案内、温
泉での裸の付き合い、世界共通のゲームの熱い対戦

での夜ふかし。この一カ月半は私にとって貴重な異
文化交流の機会になった。そして、徐々にではある
がお互いの理解が深まって、友情という言葉だけで
は言い表せない親密な感情がわいてきた。カイルの
手紙を読むと今も懐かしさでいっぱいになる。

外国人が相手でも、言葉の壁は私たちが思ってい
るほど高くはない。相手の話す言葉が分からない時
は確かにあるが、自分も相手も感情をもつ人間であ
る。言語以外に伝える方法はいくらでもある。「相
手のことを知りたい、自分のことをもつと知ってほ
しい。」という気持ちをもつて相手に接すれば、必
ず心は通じる。

カイルとの会話で感じたことがもう一つある。そ
れは、外国人との会話を充実させるには、日本の魅
力を伝える豊富な知識が必要だということだ。外国
人は日本という国をもつと知りたいたいと思ってい
ると、薄っぺらな会話にしかない。外国語が上
手になれば相手の国の人と会話が弾むというわけ
ではないのだ。「わたしの国は、こんなにいい国ですよ。
ですから、あなたにもそのよさを知ってほしいので
す。」このように自分の国の伝統や文化を誇りをもつ
て堂々と紹介し合い、そして尊重し合う関係づくり
が本当の国際交流なのではないか。

周りの友達より先に、外国人と生活を共にする
という貴重な体験をした私だからこそ、「国際交流の
意義」をこれからもじっくり考えていきたいと思う。